不肖の弟子には苦労の始まりでもありました。先生が心配をされると言いませんでしたが，いろいろなことがありました。

思えば，法学部の一員となって以来，先生のお心遣いを無視することがたびたびありました。在外研究の行き先を決めるときも，「法学を勉強するならやはり首都のロンドンにかぎる。ロンドン大学のDiamond教授を紹介してやる」と言われたのに，「大都会は嫌だ」と，先生に相談することもなく，契約法の泰斗Furmston教授がいたブリストルに勝手に決めてしまいました。大変申し訳なく思っております。

先生がご退職の際に，研究を振り返える会がありましたが，その席で突然「気分が悪い」と仰ったとき，念のためにとご一緒した病院の医師から「心電図に異常が認められるので，少し入院して下さい」と言われたときには本当に意外でした。それまで「医者の厄介になったことはない」と仰っておられたように，私には先生は頑強な身体の持ち主に思えたからです。数日後にお見舞いに行ったとき，空きベッドがなく小児科病棟に入っておられた先生は，いかにも場違いなところにいるという感じで，「もうどこも何ともないのになあ？」と怪訝そうな顔で仰っていましたね。

砂田先生。かつて二人いた専修大学の英米法担当教員は今ではひとりになってしまいました。時代は変わり，大学も変質して，英米法科目を取り巻く状況は複雑です。でも，先生から受け継いだイギリス法研究の灯火はしっかりと守っていきたいと思います。

先生，どうぞ安らかにお眠り下さい。

砂田先生の思い出

法学部准教授　**岡 田 好 史**

今村法律研究室報が，今年の３月で50号を迎えたことから，元室長でもある砂田先生に原稿依頼をしたのが先生との最後の交流になるとは，思ってもいませんでした。そのお返事の中で，今は体調が悪く原稿の依頼はすべて断っているとしたためられていたので心配していたのですが……。

砂田先生に初めてお目にかかったのは，大学２年の秋でした。当時，消費者問題に関心を持っていた私は，砂田先生が消費者保護法を研究するゼミナールを展開されていることを知り，ゼミナールを受講すべく先生をお訪ねしたのです。

ゼミの先輩方からお話を聞くにつれ，先生が厳格な方だということを耳にしていたこともあり，果たして自分はやっていけるのだろうかと不安に思ったものでした。ゼミナールでは，イギリスにおいて公正取引長官（Director General of Fair Trading）の職にあったゴードン・ボーリー卿（Sir Gordon Borrie）による第36回ハムリン講演“The Development of Consumer Law and Policy — Bold Spirits and Timorous Souls”を砂田先生が翻訳された『イギリス消費者保護政策と法――その細心にして大胆な構図』を基に，各章のテーマにしたがってゼミ生が報告し，質疑応答を行っていくというスタイルでした。少しでも質問が途切れると，先生は，おもむろに受講生名簿を見ながら「岡田君，質問はあるかね」などと学生を指名され，その時に，質問が出なかったり，発表する側の受け答えがよくなかったりすると，よく「馬鹿もん，立っとれ」と叱られました。また学生が頬杖をついていたり，窓の外をぼんやりと見ていたりすると，やはりお叱りの言葉が飛んできました（後に専大出身の先生方に伺ったところでは，多くの方が立たされた経験がおありのようでした）。噂に違わず厳しい先生だということを身をもって知ることになりました。ですが，思い返してみますと，先生は，学問に取り組む際の姿勢など，ごくごく当たり前のことを仰っていただけで，むしろその当たり前のことをきちんとやることができなかったのですから，叱っていただけただけ上出来だったのかもしれません。

今にして思えば，先生は大学の後輩である学生をただ叱っていたのではなく，愛情と時にはユーモアを交えていたのではとさえ思います。たとえば砂田先生の英米法の講義において，こんなことがありました。ある学生がアメリカの有名な大学の校名が書かれたシャツを着て授業に臨みましたが，彼は授業に身が入っていないようにみえました。すると，先生は，その学生に「君は〇〇大学に留学したことがあるのかね」と仰ったのです。聞かれた学生の方は，目を白黒させながら，「いいえ，行ったことはありません」と答えました。「胸に書かれているのは〇〇大学のことではないのか」との先生の問いかけに，学生が「そうじゃないかと思います」と答えると，「馬鹿もん。君は行ったこともない大学の宣伝をしておるのか。君が在学

しておるのは何処だ」と畳み掛けます。「専修大学です」と答える学生に，「ならば，次回からは専修大学と漢字で書かれたシャツを着てきたまえ」と仰った先生の目には笑みがあったような気がします。私が学部に在学していた平成２年くらいには，まだ専修大学のシャツは売っていなかったと記憶していますので，そのようなシャツがないことを承知で言うことで，先生はご自身の愛校心を表すとともに，学生に専大生としての自覚を持たせようとしていたのだと今は思っています。

また，夏休み明けの最初の講義において，夏休みに何をしていたかという質問を先生がされたのですが，学生が「アルバイトをしていた」と答えると，先生は，「そんなに勉強したのか」とにこやかに笑いながら仰るのです。そこで答え方のまずさに気がついても，時既に遅し。「学生の『Arbeit』は勉学である。労働ではない」と先生は一喝され，みな，立ったまま授業を受ける羽目になるのでした。

コンパの席では，学徒出陣から帰ってきて苦労されたことなどもお話ししてくださいました。君たちは学問が自由にできる環境にいるのだから，一所懸命勉強しなさいとも仰っていました。そのような大変ご苦労されたご経験があったからか，先生は常に専修大学，ひいては専大生のことを考えていたような気がします。退職されてからも，先生はたびたび今の学生はどうか，よくやっているかということを私宛の年賀状などで書かれていました。砂田先生から教わったことはとても多く，感謝の念に耐えません。最終講義で「専修大学万歳」と言って去っていかれた先生のことを思うと，先生から受けた愛情を今の学生諸君にも伝えていきたいと思うのです。

直接薫陶を受けることはもはやかなわなくなってしまったのが返す返すも残念でなりません。

砂田先生の人となりを偲びつつ，今はただ先生のご冥福をお祈りいたします。